

吸ふ息

酒井拓夢

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
花冷や煤けてゐたる土器の渦	あたゝかく枝みるひとを待つてをり	音もなく落つるよ春手袋なれば	豆菓子 <small>まめこ</small> の衣よろしき鳥の恋	永き日をくぢらのやうにものおもふ	ダンベルの確かな重さ春の峯	のどやかに貯水槽色褪せてをり	下萌や新譜はまたも愛のこと	酔へばものなべてまぶしき雪解かな	薄氷やたれも知らずにゐる言葉	バタと塩だけのパスタや春寒し	つとふれて指に鏡のつめたさよ	読初や先づはひらきてふかく嗅ぐ	星あたらし改稿に眼を焦がしては	二十代くづれて箸に喰ふ聖菓	立ち止まる者なき駅の聖樹かな	風呂洗ふ柚子の光を拾ひあげ	鯛焼の粗き鱗を嗅ぎにけり	水鳥よひと俯きて傘をさす	こゑことばしづみて雪のはやさかな	今川焼冷凍なれば皿に鳴る	息白く汝の腑の熱をおもふなり	砕けゐて土器の還れぬ枯野かな	余白には鳥と書かれて三島の忌	冬蝶の前世は葉かもしれず
冷やかや呼ぶときに吸ふ息さへも	『百年の孤独』秋薺雨の椅子に	水澄みて明日もやあをき焔炉の火	小鳥来る手紙になれぬものを書き	留守電は二件馬鈴薯切れば白	桃立たすシンの縁に夜の来て	秋されて辞書選る腕の疲れかな	長溝にみちる微熱や鳳仙花	貌よせて書けば涼しき果実かな	獼猴桃に差し入るゝ匙夜の秋	冷されし牛より牛の色垂るゝ	訣れかな青野に汝のこゑを伏し	ことなりて給水塔と百合の白	あをでは描けぬ清水とおもふなり	手紙だしそびれてゐたるゼリーかな	屋上のフェンス錆びをり夏つばめ	薄荷水めぐりて星の香のからだ	噴水のくづれてもなほみづ臭し	扇風機まはりはじめの羽透けて	撃たれゐて水鉄砲のぬるさかな	付箋紙の厚みの匂ふ夏の雨	薄暑光図録の獣うつくしき	夏めきて重なる泡のすべてに吾	ほのあをき世なり夜勤明けの桜	26